モスカ＝パレート論争をめぐって

――政治階級とエリート――

中川政樹

はじめに

近代エリート理論の学説史を語る者は、その起源をモスカ（Gaetano Mosca, 1858―1941）やパレート（Vilfredo Pareto, 1848―1923）に求めて説き起すのが通例である。モスカは今日イタリアで日常的な政治用語となっている政治階級の理論の提唱者として、パレートは社会科学において広く採用されているエリート概念のそれとして、さらに、両者はともに、前世紀後半から今世紀初頭に展開された古典的エリート理論の代表者として知られるにいたっている。モスカがやや無器用に政治階級と呼んだものを、パレートはスマートにエリートと名づけたという違いはあれ、両者は少数支配者としての政治階級あるいはエリートの普遍的存在を主張し、この観念を軸に歴史解釈と社会分析にかかわる理論を展開したのであった。それゆえ、両者については多くの場合、一方を語る者は他に言及することを求められるほどに重要なペアーと考えられ、同一の思想的・理論的文脈の中で論じられてきたのである。

事実、彼等の理論形成の時代的背景、イデオロギー的基盤および理論の論理構造には、多くの点で共通するものがある。彼等の理論は、一九世紀後半の政治・社会状況の中で形成された。何故この時期にエリート理論が形成されたかという問題は、彼等の理論の性格を知るうえで重要な意味を持つ。この時代の政治社会的特質を挙げるならば、大規模な工業の発展による都市の労働者を中心とする大衆の台頭とその政治参加の要求の高まり、そして旧来の中産的公衆すなわち財産と教養のある市民階層の相対的な地位の低下を、指摘することができる。大衆の台頭とその政治の舞台への登場は、大衆デモクラシーの始まりを意味し、それまでの政治構造を大きく変えてゆくことになった。大衆の存在が、以前にもまして社会のあり方と重要なかかわりを持つものとなってきたのである。この時期の大衆の台頭への注目こそ、エリート理論形成の動因である。政治階級あるいはエリートは、大衆の反対概念として提出されたのである。

ところで、モスカとパレートにおいて、エリートと大衆の関係は、有能なエリートと無力な大衆という対比で図式化されている。エリートは優れた能力や才能を有し、その地位にふさわしい機能を果す人々として

島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）第二十二巻―第二号一頁～一五頁　昭和六十三年十二月

描かれ、逆に大衆はそれらの能力や才能の欠如した存在と考えられている。そこに両者のイデオロギー的立場を見い出すことができる。大衆の台頭の前に相対的に地位を低下させ没落しつつある中産的市民階層の立場から、その価値を擁護し大衆の政治的無能力を批判することこそ両者の最大のテーマであった。しかし、両者の理論は、単に保守的・反動的立場からの主張にとどまるものではなかった。両者は、社会の基本的構成とその変動に関する重要な理論を提出しており、現代社会の抱える問題の分析への方法論的な一つの立場を代表しているのである。

このようなモスカとパレートの理論に見られる共通性は、両者が相互に知的影響を交換しうる環境にあったがゆえに、それぞれの理論形成の過程で有益な知的影響の交換が存在したのではないかとの推測を生ぜしめる。ところが、両者の間にはエリート理論のプライオリティー(Priorità)をめぐる対立が存在し、モスカがパレートを政治階級理論から剽窃したと非難したことによって、十数年に及ぶ論争へと発展した。論争は、感情的批判が前面に出たこと、パレートがモスカの批判を無視し続けたことなどによって、科学的論争の性格を希薄なものとし、また本来論争と呼ぶには奇妙なものとなって、さしたる成果なく終った。しかし、この論争は、モスカとパレートの理論を比較しようとする場合、無視しえない興味深いエピソードである。(1)

そこで、本稿はこの論争をテーマとして、論争過程をフォローするとともに、両者の理論形成における相互的影響の問題をとり上げ、この論争において論点とされた政治階級とエリートの両概念、および、政治階級の更新とエリートの周流の両理論を比較検討するなかで、それらの構造的特質を明らかにしようとするものである。

(1) この論争をとり上げたものとしては、J. H. Meisel, *The Myth of the Ruling Class*, Foreword, 1962. C. Mongardini, Mosca, Pareto e Taine, in *Cahiers Vilfredo Pareto*, vol. 5,1965, および、D. Fiorot, Potere, governo e governabilità in Mosea e Pareto. in A. Albertoni (a cura di), *Governo e governabilità nel sistema politico e giuridico di Gaetano Mosca*, Milano, 1983. がある。

一、論争の経過

前述のような観点から、まず、モスカ＝パレート論争の経過を述べることによって、いくつかの重要な事実を確認すること、および、両者の主張の論点を明確にすることから始めることにしよう。

論争は、モスカがトリーノ大学の一九〇二―三学年度の開始講演として行った「過去および未来における貴族主義原理と民主主義原理」(Il principio aristocratico ed il democratico nel passato e nell'avvenire)と題する講演によって、口火が切られた。この中で、彼は、パレートが一九〇二年に上梓した『社会主義体系』(*Les systèmes socialistes*)において、政治階級理論との類似性の強いエリート理論を展開したにもかかわらず、モスカに言及しなかったことに不満の意を表明し、暗にパレートを非難したのであった。すなわち、モスカは、これまで広く受け入れられてきたアリストテレスの君主政、貴族政、民主政という政体三分類を否定し、政治階級による少数支配の理論を確立したのは自分であると主張したのちに、次のように論じた。

「アリストテレスの理論とは著しく異なった新しい理論が、一八八

三年（『統治論』（*Sulla teoria dei governi e governo parlamentare*）の執筆を指す―執筆者）以後、初めてイタリアで明確に主張されたということは明らかである。このことは、パレートによっても社会主義体系に関する最近の著作の中で採用されている。しかし、奇妙な物忘れで、著名なローザンヌ大学教授は、今やパレートによってもたえず主張されている学説を初めて公式化する幸運を持ったイタリアの著者に言及しなかった。」[1]

このようなモスカの非難に対して、すでにローザンヌ派経済学の総師としての名声を確立していたパレートは、公式的に反論することなく、黙殺する態度をとり続けた。しかし、この問題は、パレートの周囲に話題をまき起こさざるをえなかった。彼の回答は、この問題に関心を示したいく人かの友人への私信の中に見い出される。パレートは、一九〇三年一二月一七日付のプレッゾリーニ（Prezzolini）への書簡の中で、次のように述べている。

「あなたが私と比較しているモスカは、私が彼を模倣したと非難した。私はそれに反論しようとはしなかった。なぜなら、私はそのようなとるに足らぬことにかかわる暇はないし、また、私がモスカと共通していることは、すべてに共通な基礎からのみ引用されているからである。国が常に少数者によって統治されているという理論やエリートが継承されるという理論は、古くから存在する。もし、モスカが、それらが彼のものだと信ずるおめでたさがあるなら、彼の幸福を祈ろう。私はそれらに関して所有権を全く持たないことを認める。私はモスカから何も得ていない。しかし、私は、ヤコープスやアモンから多くのものを、そしてまた、ラグランジュからも少しのものを得た。だがしかし、研究者たちは、いかに私が彼等と意見を異にしているかを、そして、私が付加したものを見ることができる。それゆえ、私は、私の本を公刊すのことが無益ではないと思うのだ。」[2]

さらに、同じ時期に書かれた一九〇四年一月一四日付のプラッチ（Placci）への書簡においても、この問題に関する同様なパレートの回答が見られる。

「君の論文の中で、君は私をモスカと比較していた。実を言うと、私は、彼とは全く共通するところはない。この男は、私が彼から剽窃したと触れ回っているが、私はこれらのとるに足らぬことを気にかける以外になすべきことがあるので、やつにぶつぶつ言わせておこう。彼が私より前に統治する少数者が常に存在すると述べていたというのは、そのとおりだ。しかし、彼より前に、遠い昔から多くの著者が同じことを言っていたというのも、同様に正しい。私は、何もこの概念や貴族制の衰退や更新そして永続という概念が、私のものだという馬鹿げた主張をしてはいない。ダンテにおいてさえ、貴族制が更新することが見事に表現されている。もし、モスカ君がそれらの概念が彼のものだと言い張るなら、S・メイン、テーヌ、そしてその他無数の人々と争うことになるだろう。そして、私に関するかぎりは『社会主義体系』を公刊した後にのみ、以前は知られていなかった彼の著作が引用されているのを見たのだ。」[3]

これら二つの書簡に示されているように、パレートは、政治階級あるいはエリートと呼ばれる存在については、古くから多くの人々によって論じられてきたことであるとして、モスカにプライオリティーを認めることを拒否したのである。そして、パレートは、モスカの批判を「とる

に足らぬ」であり、「他になすべきことがある」として、公式に反論することなく無視し続けたのである。モスカは回答を得ることなく、四年間を経過したが、一九〇六年、パレートは『経済学提要』（*Manuale di Economia politica*）の脚注で、初めてこの問題に言及した。ところが、その内容は、モスカを激怒させるものであった。

「社会には常に統治する少数者が存在するという事実が思い起こされる時、モスカ教授は、彼が引用されていないならば、悩み激しく動揺するようだ。彼はそのことを発見したのは自分であると信じているように思われる。彼を満足させるために、ここに彼の全著作を書き出してみよう。それは『統治論』（一八八四年）、『近代憲法論』（*Le costituzioni moderni*）（一八八七年）、『政治学要綱』（*Elementi di scienza politica*）（一八九六年）である。これらについて、私は最後のものしか知らない。しかし、統治する者が少数者であるという原理は古くから周知のことであり、学問的労作のみならず、文学作品にさえ見い出されるありふれた事柄である。」(4)

これに対して、モスカは、翌年（一九〇七年）『小論争』（Piccola polemica）と題する論文を『社会改造』《La Riforma Sociale》誌に発表し、この問題に対するパレートの不誠実さを非難するとともに、あらためて、少数者支配の原理に関する彼のプライオリティーの承認を要求して、パレートのエリート理論を政治階級理論からの剽窃であると断じている。

「その事が起こった時、私は、私の本の公刊を知らず、したがって、それを引用することなく、自然に私の有名な数節と類似した体系を打ちたてることに到達した人を思い起こさずにはいられなかった。私がこの自然さを認めることのできなかった唯一の人は、ヴィルフレード・パレート教授である。社会科学における剽窃を申し立てることは、文芸作品におけるほど容易ではないことは確かだ。なぜなら、社会科学において、最も重要なのは概念であって、形式ではないからであり、概念は常に違った語や章句で繰り返され、再生産されるからだ。……しかし、科学的な批判研究を常としている者は、一つの理念体系が、全くオリジナルなものの練り上げか、それ自体でまたは少しづつ形成されてきた精神性の自然的産物として一人の著者の中に自然発生的に生じたものかがよく分かる。その体系が先に確立されたものや、それとよく似ている体系が前に通過した他の精神の跡を残しているかが、よく分かるのだ。さて、一九〇〇年八月号の『イタリア社会学雑誌』《Rivista italiana di sociologia》に『社会学諸理論の適用』（una applicazione di teorie sociologiche）と題して、パレートが発表した研究を初めて読んだ時、そして『社会主義体系』を読んだ時、私は即座に次のような確信を得た。パレート公爵は私の政治階級、すなわち、私が『政治学要綱』やそれ以前の著作においても発表したのみならず、発表させ練り上げた概念を知った結果、彼の貴族制あるいはエリートの観念に到達したのだという確信を。この確信は他の人も持っており、それを私に伝えてくれる人は多い。……このことを理解するのは容易である。」(5)

このモスカの詳細な批判に対して、パレートの反論が期待されたが、彼はモスカの批判を依然として無視し続けた。否無視し続けること自体が一つの回答であった。それゆえ、先の『経済学提要』におけるパレートの反論は、実はこの奇妙な論争における彼の唯一の、最初で最後の関

与であった。しかし、パレートは、親しい友人との間で交わした書簡においてこの問題に触れているので、我々はその中にパレートの見解を探ることが可能である。

その一つは、一九〇八年三月一六日付アントヌッチ（Antonucci）への書簡である。この手紙において、パレートは、これまでのものより、より詳しく彼の見解を明らかにしているが、その論旨は以前彼がいくつかの書簡において述べていることと変わりない。

「あなたは、私の『経済学提要』の四〇三頁で、モスカによって提出された問題がどのようなものであるかを見ることができた。エリートの周流の理論には、多くの部分がある。(1)統治するのは、常に少数者であるという事実。モスカがこれを言ったというのは正しい。しかし、彼より前に多くの人々がこれを言ったということもまた正しい。私は、アメリカを発見したのが私であるとは決して主張したことはない。(2)人間社会が、同質的ではないという事実、優れた人々、エリートが存在するという事実、これもまた古い事である。そして、私は、この分野で何の発見もしなかった。(3)エリート、貴族制は永続しない、衰退するという事実。これもまた周知のことである。ダンテでさえ、それについて述べているではないか。私はこれらすべての事実をとり上げ、結びつけ、その関係を研究したのだ。そして、歴史的事実でもって証明した一つの理論を発表したのだ。このことに関して、私はモスカを利用しなかった。なぜなら、私の知るかぎり、彼はこのことを行わなかったからだ。私が権利を主張するのは、総理論についてのみであって、それを構成するさまざまな事実についてではない。そして、私はこの種の無駄な議論に時間を費すより他にすべきことを持っている。あらゆる著者が、常に剽窃の批判を受けていることはよく知られている。そして、世界にすべての発見の芽が存在するがゆえに、そこには真なものがある。アリストテレスの中に、ダーウィンや他の多くのことが見い出されたし、ダンテの中に、イタリア国王ヴィットリオ・エマヌエーレを含むすべてのことが見い出されたのだ。

去年一〇月、私はトリーノに行き、『スタンパ』《La Stampa》紙で、モスカの評論を読む機会を得た。その評論は、鉄道員たちが新しい封建制を形成しているという見解を長々と展開したもので、『提要』の四五五頁に書かれていることの注解であった。

私は……私が剽窃されたと言うためにひどく騒ぎ立てることを、二つの理由で差し控えた。(1)このようなとるに足らぬ問題に時間を割くことを私は好まない。(2)私より前に、同じことを言った人がいないということには確証がない。むしろもっと前から、それらの事実が観察されていたことが多いにありうると考える。モスカが『提要』以後にかかる観察を行い始めたということは確かである。しかしまた、他の多くの人々が同じ見解を持ったということもあるかもしれない。しかし、エリートについて引用されたがり、ついで新しい封建制を論ずる際にだれも引用せず、そして、『提要』の理論の注解理論を自分のものとして提示するモスカは、こっけいである。」[6]

もう一つは、モスカの問題提起からかなりの年月が経った一九二〇年のセンシーニ（Sensini）への書簡を挙げることができるが、ここでもまた先に引用したいくつかの書簡におけると同様な論旨が繰り返されているにとどまる。

「もし、私が、エリートの周流に関して私が彼を引用しなかったた

めに私と争い、傷ついた鷲のように触れ回ったガエターノ・モスカのような軽率な人間であったら、私は、私と同じことを言いながらも、全く私を引用していないレンシに対して、声を張り上げただろう。しかし、私はこのことを気にしない。むしろ、私は我々の考えがぴったり合った偶然の出来事だとのみ考えたい。私には、このようなとるに足らぬことに時間を費やすより、なすべきことが他にある。」[7]

一九二三年パレートが死去したため、両者間の対立は終息した。したがって、モスカ＝パレート論争に関する資料として我々が知りうるものは、現在のところこれまで引用したものに限られる。これらの資料から分るように、論争は、モスカの批判をパレートが半ば無視し、明確な反論を公にすることなく、なんとも奇妙な結果に終わった。無視することが、パレートの回答であった。しかし、この論争は、先に引用したいくつかの書簡からも明らかなように、両者の周辺の人々に大きな関心を呼び起し、話題を提供したのである。また、一九三〇年代に、この論争は、デ・ピエトロ・トネッリ (De Pietro-Tonelli)、エイナウディ (Einaudi)、リビングストン (Livingston) らによって再びとり上げられた。デ・ピエトロ・トネッリは、モスカのパレートに対する批判の誤りを指摘し、その非難を不当とした。[8] 逆に、エイナウディは、パレートがモスカの理論を剽窃したとはいえないにしても、モスカの主張に正当性を認めた。[9] また、モスカの『政治学要綱』の英訳者であるリビングストンは、モスカにプライオリティーを認めるが、エリート理論と政治階級理論の間に「弁証法的あるいは歴史的関係」はないと判断を下したのであった。[10]

(1) G. Mosca, Il principio aristocratico ed il democratico nel passato e nell'avvenire, in *Partiti e sindacati nella crisi del regime parlamentare,* Bari, 1949. (以後 *Partiti* と略記) p. 11.

(2) C. Mongardini, *Vilfredo Pareto, dall'economia alla sociologia,* Roma, 1973, p. 31n.

(3) T. Giacalone Monaco, *V. Pareto dal carteggio con Carlo Placci,* Padova, 1957, p. 82.

(4) V. Pareto, *Manuale di economia politica,* Milano, 1906, (以後 *Manuale* と略記) pp. 403—4, n. 3. この文章の後に E. Fournier, L'esprit des autres. Balzac, Physiologie due mariage. などからの引用が続いている。この文章は、一九〇九年に出版された仏語版の注からは、削除されている。

(5) G. Mosca, Piccola Polemica, in *Partiti*, pp. 119—120.

(6) V. Pareto, *Scritti politici,* vol. II, *Reazione, libertà, fascismo (1896–1923),* a cura di G. Busino, Torino, 1974, pp. 811–812.

(7) C. Mongardini, *op. sit.,* p. 78.

(8) De Pietri-Tonelli, Recensione a De Viti De Marco, Principii di economia finanziaria, in《Rivista di politica economia》, A. XXIV, 1934, p. 790.

(9) L. Einaudi, Dove si discorre di Pareto, di Mosca ed anche di De Viti, in《La Riforma Sociale》, A. XLI, 1934, pp. 707–711.

(10) A. Livingston, Prefazione a G. Mosca, *The Ruling Class,* New-York & London, 1939, p. XXXVI, n. l.

二、モスカとパレートの理論形成

パレートの没後一七年目の一九三八年、モスカは、彼の弟子でアメリカ在住の研究者セレーノ（Sereno）に宛てた書簡の中で、先の論争に関する新たな事実を伝えている。

「あなたが、私の著作とパレート教授の著作のオリジナリティーに関する問題に多く首を突っ込んでいるので、私はあなたにこの不快な争いを最終的に終わらせるに役立つと思われる若干の資料を提出しょう。モスカの観念とパレートのそれとが酷似していることは、二人の著作を読んだほとんどすべての人によって指摘されている。パレート教授に捧げて書かれ公刊されたG・H・ブスケ教授の本においてさえ、二〇六頁に次のような表現がある。『要するに、パレートより前にガエターノ・モスカが、エリートの周流の理論を含む疑いなく先行する理論を発表している。この著者の名がパレートの著作の中に全く見い出されないことは残念である。』（参照G. H. BOUSQUET, Vilfredo Pareto, sa vie et son oeuvre, Editore Payot, Paris. 1928）パレートの著作において、名称が変えられており、あるいは、モスカによって用いられた「政治階級」、「政治定式」の代りに、「エリート」、「残基」、「派生」など他の用語が採用された。しかし、言葉の違いは、概念の酷似を隠し切れない。パレートの理念とモスカのそれとの類似がこのようであるから、二人のうちのどちらが他に先行しているかということが残るだろう。算術的に問題のない年代順の著作に当ってみれば、答えは簡単だ。モスカは、彼の理論を一八八四年に初めて発表し（参照『統治論』）、次いで一八九六年にそれらを発展させ（参照『政治学要綱』第一版）、一九三二年の『政治学説史』（*Storie delle dottrine politiche*）に関する彼の最後の著作で、それらを完成させた。パレートの最初の発表は、専ら経済学の著作においてであった。一八九一年『二つの世界誌』《Revue des deux mondes》の一〇月一五日号に、「イタリア経済」（L' Italie économique）と題されたイタリアの政治、経済状況に関するパレートの長い論文が現われた。この論文において、著者の精神は完全に自由主義的かつ民主主義的である。パレートの新しい論考は「社会理論の適用」と題された論文であり、一九〇〇年八月の『イタリア社会学雑誌』に表われている。

一八九六年、モスカが、パンタレオーニやエンリコ・バローニ（バローネ）の勧めで、その年出版された『政治学要綱』を一部パレートに送ったが、パレートは、モスカの反動的見解を嘆いて、バローニ（バローネ）に手紙を書いたということがあった。しかし、熟慮検討の後、パレートは、この反動的見解に感銘を受け、前述の『イタリア社会学雑誌』の論文やその後のパレートの社会学の著作に明白に表われているように、彼の精神を全く変えるほどうまい考えを見い出した。[1]」

この書簡におけるように、モスカは、少数者原理の理論における彼のプライオリティーを強調し、彼の著書を読んだことが、パレートをしてエリート理論の形成を可能にさせたのだと主張したのであった。しかし、「論争者の片方が死去しているので」、この証言によって事柄の真偽を確定することは、一方に偏する結果となる。そこで、我々は、論争においてそのプライオリティーが争われ、剽窃が問題とされた政治階級の理論およびエリートの理論の形成過程を検討することによって、この論争に

おける両者の主張の当否を明らかにしてゆくことにしょう。

一八八四年に上梓された『統治論』において、モスカは、政治階級の概念を中心とする彼の政治理論を発芽的な形で提示している。「組織されたすべての社会において……統治者あるいは公的諸権力を手中にし、これを行使する者は、常に少数である。統治者の下に、現実には統治に全く参与せず、ただ服従するだけの多数者の階級が存在する。この階級は被統治者と呼ばれる。……この事実は恒常的かつ普遍的である。」[2] この命題を出発点として展開された政治階級理論は「科学的というより実際的観点から」論じられたものであったにせよ、のちの彼の政治理論を貫く基調となったのである。政治階級の更新あるいは政治定式などの概念も、すでに本書において論じられたのであった。『統治論』におけるこのような観念は、彼が一八九六年自信をもって世に問うた『政治学要綱』第一版において、さらに精緻な体系へと発展させられた。

他方、パレートは、『政治学要綱』の出版とほぼ同時に『経済学講義』(*Cours d'économie politique*) を著わした。本書において、彼は、社会が貴族制の下にあること、すなわち、少数者の支配下にあることを指摘し、さらに次のように論じた。「貴族制は、絶えず更新すること、および下層階級から最もすぐれた個人を吸収することによってのみ、それ自身を維持する。概して、閉鎖的な貴族制はすべて、数世代の後に明確に衰退する。この事実は、社会全体の進化にとって非常に重大である。」[3] ここで、パレートは、未だエリートという用語を思い付いていないにせよ、のちの彼の理論の中心となるテーマに到達している。先の文章は、モスカの政治階級の更新を想起させるが、本書でモスカへの言及は見られない。以上のように、モスカの政治階級理論とパレートのエリート理論が発表された時点の比較検討からすれば、プライオリティーの問題に関しては、前者が後者に先行していることは明白である。このことは、両者と親交のあったミヘルス (Michels) が、いち早く認めており、[4] またセレーノ宛のモスカの書簡に引用されているように、パレート研究の大家、ブスケによっても承認されているところである。この問題に関しては、モスカにプライオリティーを認めることは、今日すべての人に異存のないことと考えられる。

次にパレートが、モスカの理論をコピーしたか否か、すなわち剽窃の有無の問題が残る。この問題を考察する際に検討されなければならないことは、両者がどのような過程を辿ってその理論を形成したかということである。換言すれば、彼らの知的源泉は何であったかという問題が浮び上ってくる。

モスカは、政治階級の概念を初めて発表した『統治論』の序文において、その理論形成に多くを負った人物として、フィッシェル、グナイスト、スチュアート・ミル、ブルンチュリそしてテーヌの名を挙げている。[5] 彼は、フィッシェルからはイギリスの地方自治について、グナイストからはイギリスの支配階級について、さらにブルンチュリから統治の技術と統治の科学との区別に基づく科学としての政治学についての知識を得た。また、スチュアート・ミルからは実証主義的な方法論的刺激を受けた。そして、テーヌからはその『現代フランスの起源』(*Le Origine della Francia contemporanea*) を読むことによって、政治階級概念を形成するに有益な示唆を得た。[6] だが、政治階級概念に関していえば、それは、イタリアにおける一八七〇年代以降の反議会闘争の中から生まれた。ミンゲッティ (Minghetti) やアルコレーオ (Arcoleo) らは、議会制度のも

とでの議会の不当な行政への介入を激しく批判した。議会制民主主義批判の書として知られている『統治論』は、このような反議会主義の文化的影響のもとで書かれた。特に一八七七年エッレーロ(Ellero)は議会体制によってイタリアに生じた弊害を論ずる中で、社会を寡頭的有機体として描き出し、政治階級の概念に先便をつけた。『統治論』は、彼等に多くを負っている。[7]

他方、パレートについていえば、『経済学要綱』において、エリート理論の前提となる理論が着想されたとはいえ、彼のその後の理論的発展は、社会学への関心および接近によってもたらされた。直接的なきっかけは、一八九七年、パレートがローザンヌ大学で社会学の講義を担当することになったことである。パレートは、一八九七年二月、パンタレオーニ宛の書簡で、従来の社会学理論について論評した後、「今学期私は社会学原論の講義を行う。講義ではこれらの社会理論を発展させるつもりだ」[8]と述べている。この講義の準備のために、パレートは、コントやスペンサーの実証主義に代表される当時支配的であった社会学理論の研究に取り組んだ。ところが、パレートにとって、それらの書物は彼を満足させうるものではなかった。先の書簡から三カ月後に、彼は「私の社会学の講義には多くの受講者、特にドイツ人の受講者がいる。君がここに来れば、私たちはこの問題を議論しよう。今までなされてきたことの中には、変えられるべきことが多くある」[9]と論じた。しかし、理論形成は難渋し、彼をして「私は疑問の海の中にいる」と嘆かせたのであった。当時の支配的理論に対して生まれた疑問は、彼に理論探究の範囲を広げるよう促した。初期の社会学に関する著作において、パレートは、ルナン、バックル、ギボン、ル・ボンそしてテーヌを引用しており、彼等の影響、とりわけテーヌの影響を強く受けた跡がうかがわれる。モスカと同様に、パレートもまたテーヌから多くを負っており、テーヌは両者の共通の知的源泉となっているのである。

それでは、パレートはモスカから何を学んだのであろうか。一九〇〇年、パレートは「社会学理論の適用」と題する論文を発表し、この中で、エリート概念を軸とした理論を展開した。しかし、ここでも、モスカについてはなにも述べられていない。こうして、この時期のパレートの著作に、モスカの名を全く見い出すことはできない。確かに、『統治論』は、当時未だ無名の若きモスカによって書かれたものであったし、即座に広く普及した書物ではなかったため、パレートがこの本の存在を知らなかったと推測することは可能である。しかし、先に挙げたセレーノ宛の書簡で、モスカが述べているように、『政治学要綱』が刊行直後にパレートに謹呈されたとするならば、パレートが全くモスカの理論に触れていないことに疑問が生ずる。『政治学要綱』と同時期に執筆された『経済学講義』において、モスカへの言及がないことは納得されうるとしても、「社会学理論の適用」におけるパレートの態度は不自然である。

パレートのこの不自然さが何に由来するかを考える時、つき当たるのは、次の事実である。それは、先のセレーノ宛の書簡が証言するように、パレートはモスカから送られた『政治学要綱』から有益な示唆を得たとしても、同時に、彼が反動的と嘆いたモスカの主張や方法論に違和感、さらには反感を覚えたという事柄である。パレートは、心の内を明かすことのできる友人パンタレオーニに、モスカの挑戦以前の一九〇〇年七月二九日付で、次のように書いている。すなわち、彼の経済学の数理的方法による分析に関する話題に続いて、「モスカは、数学を悪く言う理由

を持っているのだろう。おそらく、彼は数学を知らないからだ。もし、やつが政治について書いているとしたら、空いばりのうぬぼれ屋だ」[10]と、パレートは断じたのであった。

このように、モスカとパレートの間には、その底流に感情的対立を読みとることができる。パレートは、一九〇二年に刊行された『社会主義体系』において、モスカの『政治学要論』からの引用を行っている。ところが、それは、モスカがその最初の理論的提唱者であると自負していた政治階級に関する部分からではなく、さして重要とは思われない軍隊の構成とその社会的機能についての部分からであった。この『社会主義体系』において、パレートは、エリート理論の体系をほぼ完成させているだけに、このような形での引用はむしろ侮辱に等しい。モスカの『小論争』は、『社会主義体系』におけるパレートの研究者としての態度を問題として論述されたのであった。また、両者の論争過程でパレートの示したモスカの主張を無視する態度は、彼の大著『社会学要論』においても引き継がれており、モスカの理論への評論は見当らない。

パレートがモスカの理論にほとんど言及していないことから、彼がモスカから何を学んだかは、全く不明である。さらに、パレートの理論がモスカの著作からコピーされたものだ、というモスカの主張に対しては、理論の類似性をとり上げてどこまで剽窃といいうるかという問題が残らざるをえず、真相はヤブの中にあるといってよい。そこで我々は、両者の論争でとり上げられた政治階級とエリートの概念、政治階級の更新、およびエリートの周流の問題を中心として、両者の理論の論理構造を探る中で類似性をみることにしよう。

(1) C. Mongardini, *Vilfredo Pareto dall'economia alla sociologia*, 1973, Roma, pp. 32–3. この手紙は、セレーノの次の論文を読んで書かれた。R. Sereno, "The Anti-Aristotelianism of Gaetano Mosca and His Fate," *Ethics*, XLIII, No. 4 (July, 1938).

(2) G. Mosca, *Teoria dei governi e governo parlamentare*, in *Ciò che la storia potrebbe insegnare*, Milano, 1958, p. 31.

(3) V. Pareto, *Cours d'économie politique*, vol. II, 1897, p. 29.

(4) R. Michels, L'oligarchia organica costituzionale, Nuovi studi sulla classe politica, in《La Riforma Sociale》, XIV (1907), p.963.

(5) G. Mosca, *Teoria dei governi e governo parlamentare*, p. 21.

(6) G. Mosca, *ibid.*

(7) A. Lombardo, Gaetano Mosca e la classe politica nell'età giolittiana, in G. Mosca, *Il tramonto dello stato liberale*, a cura di A. Lombardo, Bonanno, 1971, p. 33–34.

(8) V. Pareto, *Lettere a Maffeo Pantaleoni*, vol. II, a cura di G. De Rosa, Roma, 1962, p. 34.

(9) V. Pareto, *ibid.*, p. 77.

(10) V. Pareto, *ibid.*, p. 324.

三、政治階級の概念とエリートの概念

政治階級とエリートを用語として比べれば、今日前者よりも後者の方が広く用いられている。この点では、エリート概念は政治階級概念より成功をおさめたといってよいであろう。このことはモスカ自身も認めて

おり、次のように分析している。「パレートのエリートは、疑いもなく特にイタリア以外でモスカの政治階級より早く普及した。これは種々の理由による。すなわち、(1)政治階級は時期が熟さず、したがって普及に多大な困難が存在する時代に生まれたが、他方、エリートは人々が指導する少数者の概念を受け入れる準備がすでにできた時に現われたということ。(2)エリートが世に現われた時、パレートはすでに経済学者として、一定の名声を得ていた。ところが、モスカは数年前からその名がイタリアの外に知られるにいたっただけで、未だほとんど知られざる学者であったこと。(3)パレートは、彼の大部分の著作をフランス語、すなわちモスカが専ら使用したイタリア語よりもヨーロッパやアメリカでより知られた言語で執筆したこと」[1]が挙げられる。

しかし、モスカのこの判断だけでは十分でなく、パレートによるネーミングの巧みさが挙げられねばならないであろう。堅固しい政治階級という用語よりは、なにかしらスマートさを感じさせるエリートという用語が、科学以外の日常的な分野においてまでも広く用いられるようになったのは、ネーミングの巧みさによるということができる。ところが、このような成功は、その概念の科学的優越を意味するものではありえない。我々は、両概念の比較検討を行うことによって、その特質を把握することにしょう。

モスカとパレートに共通する基本的観念は、人間の本質的不平等という観念である。モスカは「富や知識の平等は存在しない……この世では能力は平等ではない」[2]と論じ、パレートは「人間が客観的に平等であるという主張ははなはだしい謬妄であり、反駁に価しないものである」[3]と述べた。このような観念は、人間を優れた資質や能力を有する少数者とそれ以外の多数者に分類し、前者が後者に優越するものとする。そこに少数の支配者と多数の被支配者の普遍的存在という図式が成立する。モスカは「……すべての社会には人間の二つの階級、統治者の階級と被統治者の階級が存在する」[4]と論ずる。前者は後者よりも常に少数であるが、全政治的機能を掌握し、権力を独占し、権力のもたらす利益を享受する。他方、後者の多数と占める階級は前者により命令され統制されている。この統治者の階級が政治階級と呼ばれる。他方、パレートもまた、「我々は、全住民をまず二つの層に分つ。第一は下層すなわち非エリートであり、……第二は上層すなわちエリートである」[5]と述べ、人間社会を少数のエリートと多数者である非エリートからなる社会的ピラミッドとして描く。前者による支配と後者の服従、これが社会の実相である。

それでは、政治階級あるいはエリートたる地位を獲得しうる資質とは、一体どのようなものであろうか。モスカは、時代と場所によってこの資質は変化すると説く。それは、軍事的武勇、宗教的権威、富、知識そして生まれ（世襲）である。これらの資質を保持することによって、政治階級の構成員たりうるのである。ところが、「政治階級は、権力獲得に役立った資質をもはや活用しえない時、あるいは、これまで行ってきた社会的貢献をもはやなしえなくなった時、または、彼等の資質がその社会環境のなかで重要性を失うにいたる時は、いつも必ず没落する。」[6]換言すれば、「ある社会で新たな富の源泉が開発された場合、あるいは、知識の実用上の重要性が増した場合、また、旧来の宗教が衰退して新たな宗教が発生した場合、さらに、新思想の潮流が広がった場合、こうした場合には、支配者の階級内部に深刻な崩壊が生ずるのである。」[7]このように、政治階級の構成における変化は、社会内の重要な利害、あるいは、

重大な社会的・政治的影響力を持つ資質の変動に由来するのである。

政治階級は、その内部の劣悪化した分子を排除し、下層から優秀な分子を吸収することによって、絶えずその「若返り」をはかっている。社会は、このような政治階級の構成員の部分的交替、つまり新陳代謝の機能を働かせることによって、政治階級を永続させるのである。モスカはこの「若返り」を政治階級の更新と名づけた。しかし、政治階級が、新しい構成員を補充しえず、「若返り」ができない時、既存の政治階級は、下層から生まれた新しい政治階級によって打倒されざるをえない。すなわち、征服や革命による政治階級の全体的交替である。征服や革命による急激な政治階級の変動は、政治階級の円滑な更新が妨げられることによって生じる破局的な事態なのである。それゆえ、モスカは、社会変動の主たる形態として、政治階級の更新に大きな関心を寄せたのであった。

他方、パレートはエリートの資質として、活動力、優越などを挙げた。彼もまた、「エリートとそうでない残りの人々」との間に、不断の移動が存在すると考えた。「社会集団を形成する原子は決して休止しない。……きわめて広大な運動が、社会有機体の内部に動いている。社会有機体は、この点において生物有機体に酷似している。」[8] 彼はこの運動をエリートの周流と呼んだ。エリートの周流は、政治階級の更新と同様にエリート内の退廃分子を排出し、非エリート内に生まれた優秀な分子を吸収することを意味する。エリートの周流によって、「統治階級は、諸下層階級から興隆してきた諸家族によって数の上で補充されるばかりでなく、より重要なことには、質の上でも補強される」[9] のである。したがって、エリートの周流は、エリートの存続に不可欠の活動であり、社会有機体内部の正常な生理活動なのである。ところが、この活動が停滞して「周流が低下すると、その結果、権力を保持している諸階級の中の退廃分子が大幅に増大し、他方では、従属階級の中に優れた資質が増加しがちである。そのような場合には、社会均衡は不安定となり……ちょっとした衝撃によって破壊される。征服や革命による騒擾は、新たなエリートを権力につけ、新たな均衡を生み出す。」[10] したがって、征服や革命による急激かつ強制的なエリートの交替は、モスカと同様に、既存のエリートが新しい構成員を吸収することによって、自らを強化しえなかったことの結果なのである。

しかし、モスカと異なって、パレートは彼の社会学理論において、エリートの周流による社会変動の原因を単に個別的能力や資質の変化に求めていない。エリートの周流には、もっと本質的な基底が存在する。彼は、それを人間行為、特に非論理的行為を分析することによって到達した残基（residuo）の概念で説明する。残基は、人間行為を究極的に規定する恒常的かつ本能的基調である。パレートは、残基を六つのカテゴリーに分類した。すなわち、「結合の本能」（Istinto delle combinazioni）、「集団の持続」（Persistenza degli aggregati）、外的行為で感情を表現しようとする欲望」（Bisogno di manifestare con atti esterni i sentimenti）、「社会性と関連する残基」（Residui in relazione colla socialità）、「個人とその従属物の保全」（Integrità dell'individuo e delle sue dipendenze）、「性的残基」（Residuo sessuale）である。[11] 人間行為は、これらの残基によって究極的に規定されている。分けても、パレートが、人間行為の規定性の強い残基として特に重視したのは「結合の本能」と「集団の持続」の二つであり、他の残基はこの二つの残基に包括されてゆく。

エリートの周流は、この二つの残基がエリート内部でその比重を変化させることに、重要な契機を有するのである。すなわち、「革命の原因は、社会の上層における退廃分子の累積にある。これらの退廃分子は、権力を保持するに適した残基をもはや失っているか、あるいは、権力行使をためらうごとき分子である。他方では、その間に社会の下層に統治機能の行使に適した残基を所有し、権力を容赦なく行使しようとする優秀分子が前面に躍り出てくるのである。」[12] 要するに、エリート「結合の本能」か「集団の持続」かのいずれの残基を有するかが、エリートの周流に大きく影響してくるのである。パレートは、「結合の本能」を有するエリートを近代社会の資本家では「投機者」、「集団の持続」のそれを「金利生活者」という理念型で示している。[13] この区別は、マキャヴェッリの「狐」と「ライオン」の二類型に対応しており、前者は政治的操縦に優れたエリートであり、後者は力の行使に優れたエリートである。社会は常にこの二種の残基を代表するエリートの周流による変遷を示すのである。

それでは、右に述べような論理構造を有するモスカとパレートの理論は、どのような目的を持つものであろうか。人間の本質的不平等という観念から演繹された彼等の少数支配の理論は、逆に人間の本質的平等を主張し、すべての人がなんらの制限もなく平等に政治に参加することを要求する人民主権の理論、あるいは、いわゆる古典的民主主義の理論の否定を意図したものである。モスカは、「……すべての人が平等で、一つの階級が他の階級に従属させられることなく、あるいは、すべての人が等しく政治に参加するよう組織された社会を想像することは、ほとんど不可能である」[14] と述べた。彼によれば、「民主主義の根本的誤りは、多数者の実効的統治を熱望することにある。それは望ましいことであるが、直接的には不可能である。」[15] 近代国家においては、直接民主制はもとより不可能であるが、代表による間接民主制も多数者の実効的統治を実現しうるものではない。なぜなら、選挙の現実は、支配的少数者が多数者をあらゆる手段で操作することによって、「自分で自分を選出する」ものだからである。[16] 一九世紀以降の普通選挙制の採用は、一般に人々の平等な政治参加を実現しうる機会と考えられていた。ところが、モスカやパレートにとって、人間の本質的不平等の存在は、人民による政治を実現不可能な神話とし、民主主義的と称される制度の実態は、その理念とかけ離れて少数者による寡頭制に他ならないのである。[17] このような主張は、彼等が古典的民主主義理論と同じ系譜につながるものと考えた社会主義理論への批判としても展開されたのである。

(1) C. Mongardini, *op. sit.*, pp.32—33n.
(2) G. Mosca, *Partiti*, pp.103—104.
(3) V. Pareto, *Manuale*, p.26.
(4) G. Mosca, *Elementi di scienza politica*, vol, I, 5ªed. Bari, 1953, (以後 *Elementi*. I. と略記する) p.79.
(5) V. Pareto, *Trattato di sociologia generale*, (以後 *Trattato*. と略記する) vol.II, 2ªed. Milano, 1964, §2034, p. 531.
(6) G. Mosca, *Elementi*. I, pp.101—102.
(7) G. Mosca, *ibid.*, p.101. このことは、別の言葉で、「政治諸勢力のバランスが変動した時、言い換れば、旧来の能力とは異なった能力が国家の運営上発揮されねばならぬと感ぜられるにいたった時、したがって、

旧来の能力が重要性を失ったり、その分布が変動したりした時、支配者の構成にも変動が生ずる」と説明されている。*ibid.*

(8) V. Pareto, *Les systèmes socialistes*, vol. I,（以後*Systèmes.*と略記する）Paris, 1926, p. 27.

(9) V. Pareto, *Trattato.*, vol. II, §2054, p. 539. vgl. *Systèmes.*, I, pp.28—30.

(10) V. Pareto, *Systèmes.*, I, p. 30.また、「エリートの周流の結果として、統治エリートは緩慢かつ継続的に変化しつつある。」*Trattato.*, vol. II, §2056, p. 539.

(11) V. Pareto, *Trattato.*, vol. I, 88—1396, pp. 525—877.

(12) V. Pareto, *Trattato.*, vol. II, §2057, pp. 539—540.

(13) V. Pareto, *ibid.*, §2233—2234, pp. 667—668.

(14) G. Mosca, *Elementi.* I, p. 79.

(15) G. Mosca, "Aristocrazie e Democrazie," in *Partiti*, p. 332.パレートもまた、民主主義に対して、抜き難い不信の念を表明している。V. Pareto, *Manuale*, p. 50.

(16) 「選ばられた人が、彼を選ぶ多数の人々の代弁者であるという仮説は、通例、事実と一致しない。」「……事実は、代表者が（自らを）選挙民に『選ばせる』のである。」G. Mosca, *Elementi.* I, p. 205.

(17) パレートは、「このエリートはあらゆる社会に存在し、これを統治する。政府が外見上もっとも民主主義的なものであろうとも、同じである」と論ずる。V. Pareto, *Manuale*, p.50.

おわりに

モスカ＝パレート論争における両者の態度は、決して誉められるものではなかった。政治階級理論の発展によって、「統治する少数者」に近代的理論付けを与えた最初の人物であることを自負していたモスカは、パレートにエリート理論にたいするプライオリティーの承認を求めた。それは、彼の虚栄心と功名心を満足させるためのでしかない。論争がプライオリティーをめぐる争いに終るかぎり、論争を通じての科学的な理論の発展を望むことは不可能であったのである。もし、モスカが、自己の理論のオリジナリティーやプライオリティーに確信を持っていたなら、パレートによって引用されることにこれほど拘泥する必要はなかったであろう。また、モスカの主張を反芻してみると、パレートの理論を批判するに際して、批判の対象とした理論の深い考察を欠いているのではないかとの感が強い。モスカは、論争においてパレートの諸概念をほとんど引用することなく、自らの理論との比較考察を示していない。論争が、両者の理論の深化発展へとつながらなかった原因の一つは、モスカのような姿勢にあったといえるだろう。

他方、すでに経済学者として名声を確立していたパレートは、このような若きモスカの虚栄心と功名心による論争の提起を、一貫して無視し続けた。彼が公刊した書物において、モスカに触れたものは、モスカに対する侮蔑とも思われるものであった。パレートが、エリート理論に類似した理論の提唱者として、モスカの名を挙げることをかくも頑強に拒む必要はなかったであろう。このような不遜な態度もまた論争を不毛な

ものにした原因の一つと考えることができる。本論で引用したブスケの言葉のように、パレートの著書の中にモスカの名を見い出すことができないのは、残念としか言い様がない。両者の論争が、相互に有益な影響力を行使し合って、それぞれの理論的発展へとつながらなかったことは、真に惜しまれる。

モスカとパレートの理論には、類似点が多いことは確かであり、モスカは、この類似をもって、パレートが彼の理論をコピーした、すなわち剽窃したと非難した。しかし、類似しているということから、ただちにコピーあるいは剽窃との非難が発せられることは、不当である。すでに論じたように、両者は、テーヌに代表されるように、共通の知的源泉を有していた。また、パレートがモスカの書を読んだとしても、前者は後者から得たであろうものを、彼の理論体系の中で練り上げ再構成していると考えてよい。これに、コピーあるいは剽窃との非難は当たらない。両者の理論に類似し共通するところが多いとしても、逆に、相違するところも同様に多いのである。本稿では、類似点それも政治階級とエリートを中心とする諸概念についてのみ限られた範囲で検討したが、それらは、両者の思想の全体を分析する中で、改めて検討されなければならない。これは、今後の課題とすることとしたい。（昭和六十三年九月一〇日）